

現代建築

復刻版

用語録

宮脇 檀・コンペイトウ……著

復刻管見

41年前、33年前に出版された2冊、著者は故宮脇檀とコンベイトウ。檀さんが62歳で亡くなって早13年が経ち、コンベイトウはいずれも檀さんの没年を超えた。

そもそのきっかけは情報科学芸術大学院大学および東京大学の名誉教授である横山正さんを誘い、彰国社から1冊、出版しようということだった、と聞く。檀さんは四谷三丁目の木質アパートで最初の事務所を始め、この時、横山さんは午後7時から10時までの社員第1号。3歳年下の気心の知れた友人だった。横山さんは生憎、イタリア留学に出発し、檀さんは「マ、ショウないワ」と10年近い後輩のわれわれを呼び出した。

天から槍が落ちてこようが、コンベイトウはヘイチャラと何食わぬ顔をしながらも、学生の分際と10年先輩では知識・経験の大差は紛れもなく、「吉村順三先生が設計したもっとも小さくて（13坪）もっとも安い家（を）…建蔽率、容積率の許す限り周りに増築して、宮脇家と宮脇事務所を入れて、50坪の家にして住んだのです」（「宮脇檀一わが軌跡を語る」別冊新建築1980年9月）と檀さん自ら追想した事務所に、打ち合わせを口実に入り浸り宮脇蔵書を読みかつ筆記し、2年余りが瞬時の如く飛び去った。

33年を遡ることさらに数年以前は、青山基地のなかを突っ切る桜並木から横町に折れた、とあるアパート。コンベイトウの2人はヨコのものをタテにすることを覚え、読んでは記す生活を続けていた。こういう時ばかりは「檀先輩」と、2人で1冊分の原稿を準備し、檀さんに「まえがき」をお願いし、共著のかたちをつくった。

1970年代、東大安田講堂、新宿地下通路、大阪万博、浅間山荘、防衛庁本館などでの出来事の波紋は、アメ横調査、都市モニュメント廻り、蓼科山小屋や戸隠ドーム建設などと共にコンベイトウの生活や作業を浸し、2冊の著書に及んだ。10年越しのコンベイトウは、この時代をもって終焉。

勝手に「先輩格として意識し、興味を覚えた八田利也」のような、アイロニーの刃先をもたぬ甘いコンベイトウの著書は、先輩の名著とは比するべくもない。はたして復刻に馴染むか、読者掌中の書たりうるか……、忸怩たるものがある。

目次

- | | | | |
|----|---------------------------------|-----|---------------|
| 12 | ARCHIGRAM | 76 | コアシステム |
| 14 | Architecture without Architects | 78 | 構成主義 |
| 16 | アーケード | 80 | 構造デザイナー |
| 18 | 新しい都市交通 | 82 | 五感建築 |
| 20 | アーツアンドクラフツ運動 | 84 | 五期会 |
| 22 | アテネ憲章 | 86 | ゴシック |
| 24 | アーバン・スプロール | 88 | コートハウス |
| 26 | アーバン・デコレーション | 90 | コンクリート打放し |
| 28 | アメリカの新世代——体験派建築家たち | 92 | サリヴァン |
| 30 | アールヌーボー | 94 | CIAM |
| 32 | インターナショナル・スタイル | 96 | シュルター |
| 34 | インテリア | 98 | シカゴ派 |
| 36 | インフラストラクチュア | 100 | 自動車 |
| 38 | エキステイクス | 102 | シドニー・オペラハウス |
| 40 | SOM | 104 | 借景 |
| 42 | M.C. | 106 | 住宅産業 |
| 44 | LCCからGLCへ | 108 | 週末住居 |
| 46 | L+B | 110 | ジョイント |
| 48 | かいわい | 112 | 城下町 |
| 50 | 輝ける都市 | 114 | 食環分離 |
| 54 | 桂と日光 | 116 | 真行草 |
| 56 | カーテンウォール | 118 | 新建材 |
| 58 | 機能主義 | 120 | 新古典主義 |
| 60 | 空気構造 | 122 | 新都市 |
| 62 | クラスター | 124 | スケール |
| 64 | 形態は機能を啓示する | 126 | スターリング |
| 68 | CEAM | 128 | ストリート・ファニチュア |
| 70 | ケヴィンとベイ | 130 | 施工会社設計部 |
| 72 | 幻想の建築 | 132 | 第1期カリフォルニアの住宅 |
| 74 | 建築家 | 134 | 大架構 |

136 大バリ計画
138 タウンスケープ
140 丹下健三
142 団地
144 地下街
146 チーム X
148 帝国ホテル旧館
150 テクニカル・アプローチ
152 デザイン・サーヴェイ
154 デ・スティール
156 田園都市
160 伝統論争
162 東京計画—1960と麹町計画
164 道路からの景観
166 都市のイメージ
168 都市のコア
170 都市はツリーではない
172 NAU
174 中廊下
176 2DK
178 日本の都市空間
180 ニューブルータリズム
182 バウハウス
184 パースペクティブ・ビュー
186 パルテノン
188 “はれ”と“け”
190 バロック
192 万国博覧会
194 P.Sコンクリート
196 被サービス空間——サービス空間

198 尾州檜
200 表現主義
202 ピロティ
204 広場
206 フィラデルフィア——都市の歴史
210 複合建築
212 フラー
214 プランナー
216 プリミティブ・ビレッジ
218 プレファブ
220 分離派
222 マンション, コーポ
224 ミース・ファン・デル・ローエ
226 未来都市
228 未来派
230 民家
232 ムーブメント
234 メタボリズム・グループ
236 モビールユニット
238 ユニテ
242 ライト
246 理想都市
250 ル・コルビュジエ
252 ルーバー
254 ローマ——都市の歴史
256 ロンドン——都市の歴史

258 文献
275 索引
286 引用文献

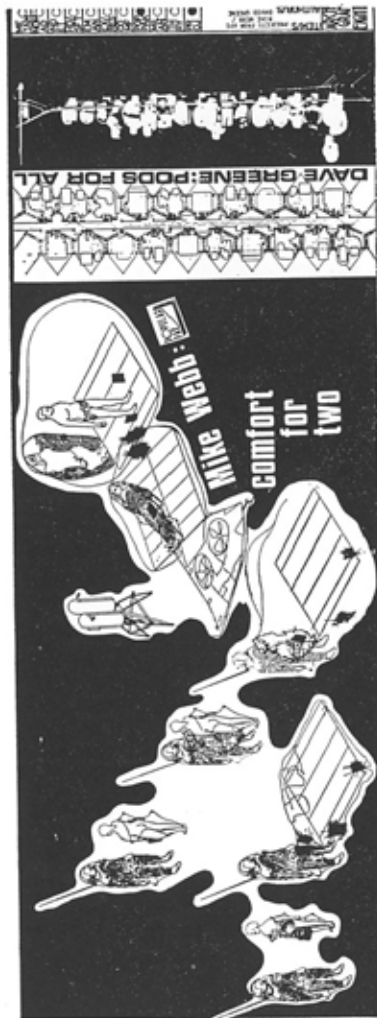
1961年ピーター・クック(1936~)が中心となってデヴィット・グリーン(1937~)、マイケル・ウェップとともに雑誌「アーキグラム」を刊行する。第1号はさほど世評を浴びなかったが、テオ・クロスビーを通じてちょうどLCCでティーンエリザベス・ホールの設計に携わっていたウォレン・チョーク(1927~)、ロン・ヘロン(1930~)、デニス・クロンプトン(1935~)のグループと接触を持ち、一つのチームとしてクロスビーに協力してディラーウィドロー建設会社のニューストン駅再開設計画を進めることになり、同時に6人は雑誌「アーキグラム」を通じてプロジェクトを発表する。6人の結びつきは、「ある程度係わりを持つ思想や感情の持主とだけ付き合えばよい(ウォレン・チョーク)。」(第7号)のごとく、CIAM やチーム X などのように明確な運動方針を持たず、6人のほかにアーキグラムに参加している者も多い。

こうしてアーキグラムはその後ホラインのBAU, イギリスではMegascop(1964~)ノール・ロバーツほか編, Clipkit(1966~)P. マーレイ編など、造らない建築=グラフィック・アーキテクチュアの先鞭をつけることとなる。

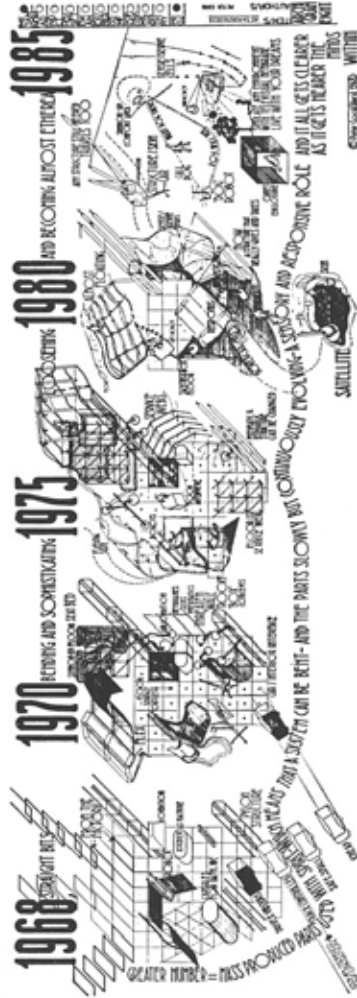
プロジェクトの素材がまた「ダイダアの心理学とスーパーマンの心理学, 月世界の建築と小麦製粉所, ラジエー

ター・グリルとロケット発射台, こういう対極的なものに同じように係わり合うこと」(第2号)。パロディックな都市装置のプロジェクトに、決定的な影響を与えたものは宇宙ロケットとその作業場であろう。そこに巨大な機械類の動きと制御するコンピューターを見る。それは「歩く都市」(ロン・ヘロン)や「プラグイン・シティ」(P. クック)等のプロジェクトで、カプセル, ネットワーク, チューブ, クリップ止めという概念に結びつく。

アーキグラムのプロジェクトを機械美とともにささえた要因は、イギリスを初めとして人間の生活, 文化が60年代を境に大きく変貌をとげた点にある。人間生活の基盤が揺れ動かなかで「完全消費性」「クリップ止め住居」という概念が生まれ, 第7号以降から始まる物と人間との係わり合いへの興味は宇宙船内部の人間の行動, 宇宙服の完全カプセル性の都市への置きかえのごとく人間の行動を探っていく方向を取り始め, インスタント・シティ「2人のための快適さ」と題された不思議な服, 「マンザック」という奇妙な家庭用品に集約する。アーキグラムは未来の建築に見えるかもしれぬが, それは現在の状況を丸のみにしたカリカチュアであり, 彼らの言うようにいつ現われるかもしれない。



デイブ・グリーンの「みんなのポッド」
マイク・ウェップのポップバック「2人のための快適さ」



ピーター・クックのプロジェクト

アーキグラム第8集より

アーバン・スプロール

東京の丸の内に夜間居住しているのは、守衛ぐらいたと言われるほど、都心では夜間人口が激減する反面、周辺の近郊地域に人口の過密状態を呈している。この現象は日本のみならず、世界の大都市に共通の現象でもある。

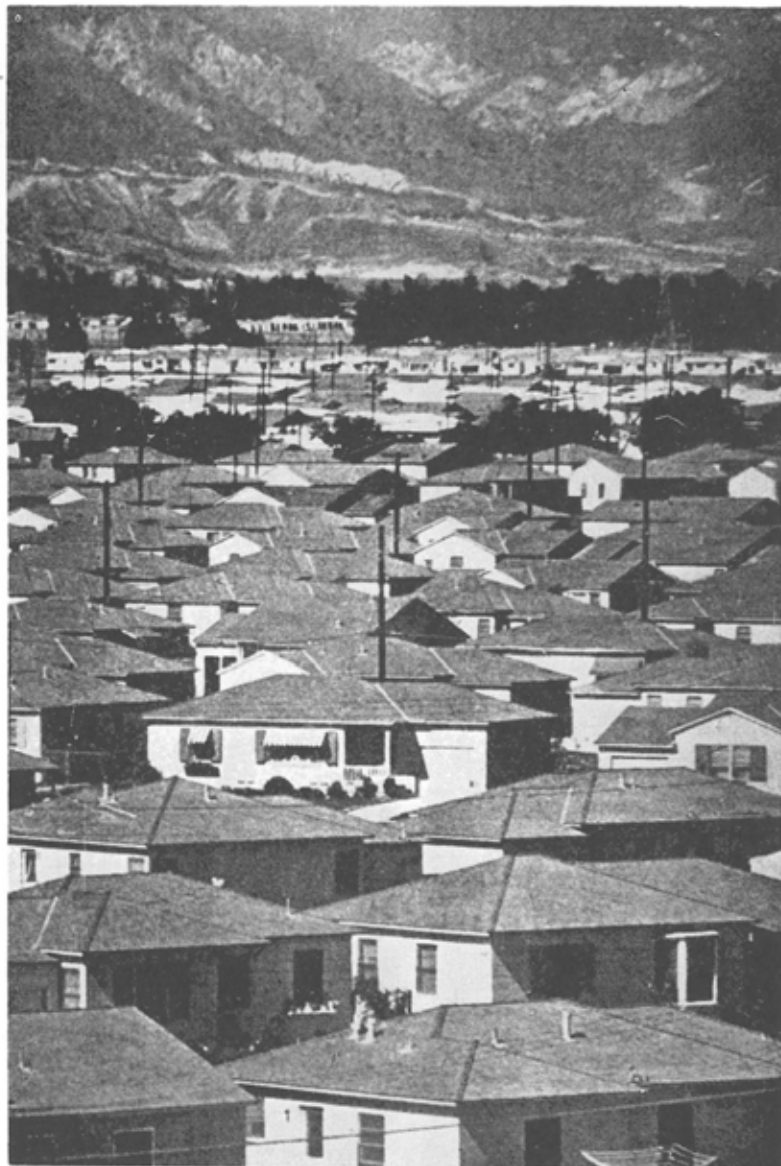
ロンドンでは、中心のシティ人口が19世紀末から減少し始め、周辺の半径10kmのカウンティ人口も今世紀初頭の454万人を最高にその後減り始め、さらに外側の大ロンドン部分も第二次世界大戦後は外へ拡大している。パリも市内人口は20世紀にはいと頭打ちで、セーヌ・エ・オワーズ県へと移っている。アメリカは、人種問題も影響し、ワシントンでは中心部の黒人街のスラム化が、白人の郊外逃避を助長している。

日本の場合、昭和30年以降の高度経済成長期に、人口5万人以下の小都市は人口減少を示し、50万～100万人都市の増加が著しく、35年から大都市は停滞し20万～30万人都市が成長し始めた。これは大都市周辺の郊外ヘドーナツ型に夜間人口が拡大したことを示している。農業や石炭産業に依存した市町村、大都市から離れた市町村は淘汰され、南関東や近畿臨海の東京・大阪50kmの圏内にあるベッドタウンは爆発的に人口増加が進んだ。

アーバン・スプロール現象の根底は

土地問題にある。高度成長施策は、急激な設備投資増に伴う工場用地と企業の管理部門の拡大をもたらし、同時に中央官庁と結びつけて東京に集中する傾向を強め、さらに企業は庶民が家を建てようと貯蓄した資金を銀行から融資を受け、土地買収を計り、費用は経費として計上して値上がりを待つ資産とする。つまり庶民が家を建てるために貯金するほど地価が高くなるという矛盾が働く。大ロンドン計画を模した首都圏整備計画も、財政支出を既成市街地にあまりに近い衛星都市の開発に重点を置いたため、地価高騰をより進め、そのうえ郊外農地が細分化されているのに加えて、零細不動産業者がはいることにより、いっそうの土地分割が起こり、住宅金融公庫の融資さえも借地困難から小規模の土地購入にあてられるために、結果的には地価高騰に肩入れをしていることになる。こうした悪循環の結果、都心にはビルが建つが、大衆は地価の安い郊外へと移住を続けることとなり、通勤の交通量も増大し（駅ができたり交通の便が良くなると、移住者が増し、地価が高騰する）、道路事業もまた進まず、オフィス・工場の水の需要増から水不足に悩み、ゴミ・下水道等の環境施設の不備も起こる。

スプロール現象は、マンションをいくら建てようとも解決はしない。



やがてスプロールは山の斜面を登り始める

空気構造 (pneumatic structure)

ニューマチック構造とも言われる。空気圧によって構造物を形成しようとするものは、建築以外の分野でさまざまに使われてきている。最も初願的なものはゴム風船に見られ、気球飛行船、自動車のタイヤ、救命ボート、ホバークラフト、それに最近のニューマチック・ファニチュアなど、すべて空気圧を利用した構造物である。

この構造の研究は18世紀後半フランスで熱気球の研究で始められ、その後水素気球から飛行船へと発展した。空中上昇へのあこがれが推進力となっていた。初めて建築への可能性をうちたてたのはイギリスのF.W.ランチェスターであるが、初めて実現させたのはV.ランディとワルター・バードによるモビールシアターである。その後レーダードーム、兵舎、倉庫など軍需と結びついて発展した。そして1958年のブリュッセル博のパンナム航空館を契機にヨーロッパや各地に広まり、新しい建築空間の要求に答えるものとして急速な発展が見られる。特に1967年ドイツで空気構造に関する会議が開かれ、1970年の万国博で大々的に用いられている。しかし空気構造はまだ未開拓の分野と言える。

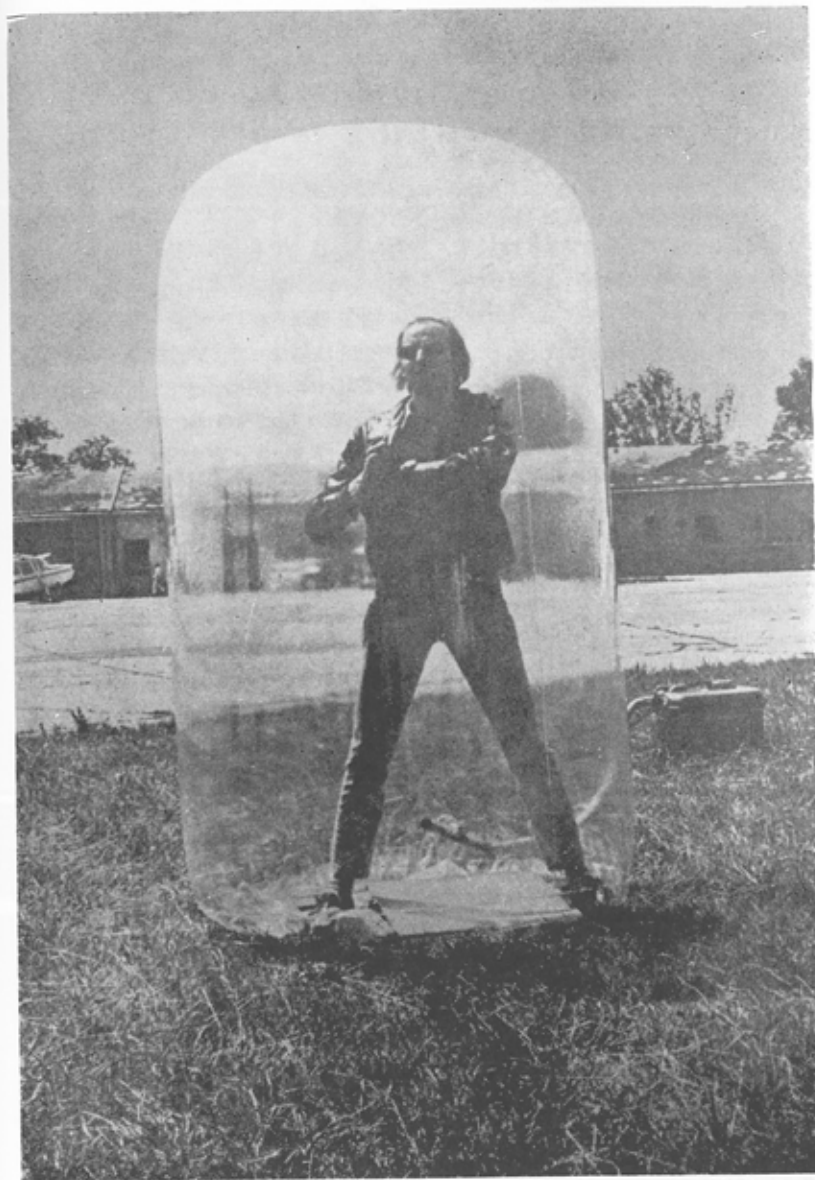
空気構造の将来の可能性の一つは巨大化への道である。用途に従うのではなく、人工環境化、気候化を生み出す

とき空気構造の軽さと施工の簡便さと透明性は最適のものである。

空気構造の施工のインスタント性と運搬されるときコンパクト性は、今日、空間と移動性に対してフレキシビリティが要求されているとき有効である。また今日のプレファブにかわるべき「ふくらむ家」^{注)}の可能性もある。

また空気構造のテクスチュアと形態は、建築や建築以外の分野に新しい概念をもたらした。そのテクスチュアと形態は触覚的と言われるように一種のエロティシズムを感じさせる。その非重量性は人に重力から解放されたイメージをひきだす。それはインテリアの分野に進出し、また新しい環境芸術のオブジェとして出現した。ありふれた素材と加工の簡易さ、コンプレッサーさえあれば個人的レベルで環境全体に作用するものを同時に作り出せることは、構造体の概念をかえ、人と環境の係わり合いの固定性をうち破れるものかもしれない。

注) 二重の膜の間にプラスチック・フォームがはいり、送風機で建てあげられた後、フォームは硬化する。空気がコンクリートにおける型枠となるもの。もう一つはふくらました後、膜材料そのものを薬品処理により硬化させる方法であるが、このときやはり膜材料によるリブが必要。どちらも自由な曲面が選択され、つくられる。



ハンス・ホラインのポータブルオフィス

道路からの景観 (view from the road)

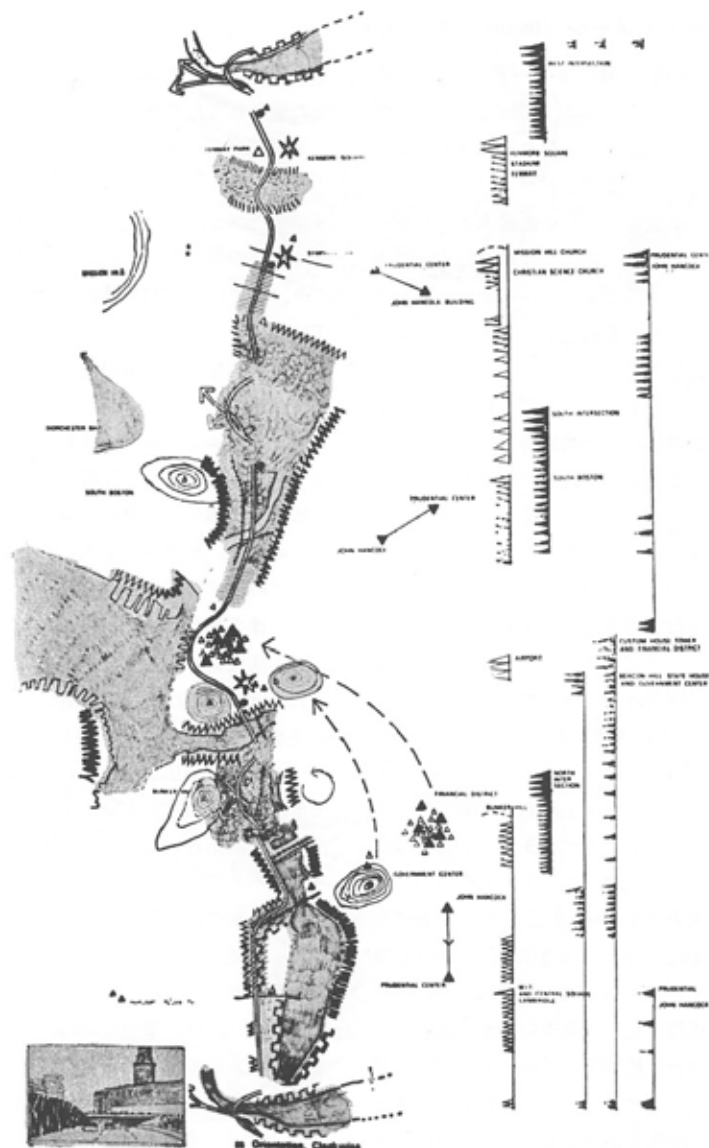
1964年に出版された本で、アメリカ人が毎日多くの時間を費やすハイウェイの美学をつくらうというK. リンチ、D. アップルヤード、J. マイヤーの協同研究をまとめたもの。

ハイウェイにおいて観察者はシーケンス（連続的）な動きをするという前提のもとに「注意を促すエレメント」「空間の感覚」「目的地へのアプローチ」「オリエンテーション（地域全体のなかでの位置確認のための要素）」「意味づけ」「リズムと連続感」「連続的な形態」といったデザイン要素をあげ、デザインの目標を連続感とリズム感を持ち、コントラストがありしかもうまく組み合わせられた変化をする豊かで統一性あるシーケンスを観察者に与えること、ドライバーの環境に対するイメージを明確にし、強め、彼が道路というランドスケープの主要な性格と位置を把握できるようにすること、観察者が、ハイウェイとその周囲の利用状況・歴史・シンボルを理解し環境の意味をより深く把握できるようにすることだとする。つぎにハイウェイを分析し、コミュニケーションし、デザインする道具としてドライバーの動き、視野の変化、通過する場の空間的性格、それにオリエンテーションという記号化する対象をあげ、それぞれに細かく記号を与える。そしてボストンのハイウェイ

をケーススタディとして美学的規準のみからスタディしている。まず既存のハイウェイを記号化し分析することによって欠点を抽出し、これとともにボストン地域全体の視覚構造的にみた欠点とポテンシャルをサーヴェイする。こうしてハイウェイからの景観のイメージアビリティを豊かにすると同時に、ボストン全体の視覚構造を明確にするようなルートをデザインする方法を示している。

「都市のイメージ」においてもこのスタディにおいても、著者は都市デザインに一貫した方法論をもって臨んでいる。それは都市の内部にいる観察者となつて、現実にある都市のフィジカルな環境を読みとることを出発点として、そこで人びとの持つ心象を操作の対象としてデザインし、それを再び、フィジカルなものに翻訳するという過程をとる。つまり、それは心象化されたフィジカルな環境を記号化し、その実体としての環境を言葉がそうであるような、一種のシンボルに置き換え、そのシンボルの操作がすなわち実体の操作であるという作業なのである。

これはアメリカ社会学のもたらした調査方法から多くの影響を受けたプラグマティックな方法論で、チームX（→p. 146）の概念的な方法とは非常に対照的な、しかし重要な方法である。



ボストン・ハイウェイの右回りのノーテーション

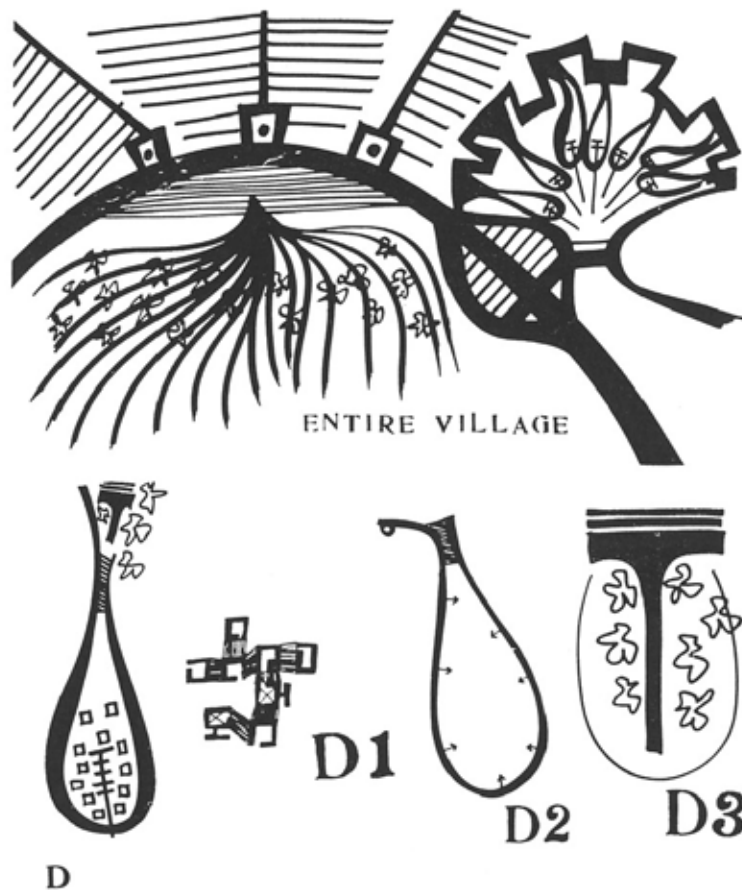
都市はツリーではない (a city is not a tree)

これはアレキサンダーが1965年に書いた小論である。彼はそこで都市での人びとの活動は、各種の都市プロジェクト(人工の都市)に示されているような建築家にとって都合のよい施設のヒエラルキーな構成とは一致しないと主張する。施設のヒエラルキー構成と人びとの活動のあり方との不一致をツリーとセミラチスという二つのパターンで示し、たとえばニュータウンの施設はツリーであるが、そこに住む人びとの活動のあり方である圏域をとってみるとセミラチスであるという批判をしている。これはわれわれにもたらされたCIAMや英国ニュータウン運動における方法に対する重要な批判である。「形の形成に関するノート」を参照しながら彼の考えを要約する。人びとの活動は変化の激しいダイナミックなわれわれの時代には複雑なつながりや重なりを持ちながら営まれている。しかもわれわれの思考方法は、分析し分類し、それを同類項をくりながら再構成してみるというツリー型である。今まで建築の分野でなされていた一つのあやまちは、新しい都市を考える際に町(タウン)、近隣住区(ネイバーフッド)、広場といった言葉を、それまで、その言葉の持っていた内容を人口とか広さという一面的な規定だけでとり出し配置し、人びとが寝に帰るだけの町

や、だれも寄りつかない広場をつくってしまったことにある。まずツリー型の思考をするときの、その基本的な言葉の内包的意味の再検討の必要性を彼は強調する。また重なり合いに関しては、その重なり合いを分解しツリーの複合化されたものがセミラチスという考え方をとる。ある建築物(あるいは都市)をそれに関係ある事象の集合として考え列挙し、それぞれ関係のあるものごとに分類し複数のツリーをつくり(一つ一つがサブセット)、そのツリーを解き、それを再び再構成するという考え方である。こうした彼の方法はインドの村落、あるいは「コミュニティとプライバシー」での集合住宅の分析以来一貫したものであるが、以後「システムをつくるシステム」で全体を形成する一定の関係づけであるルールと、そのルールによって組み合わせられる要素という生成的なシステムを示し、アルファベット—単語—文章—小説—詩というシステムのアナロジーを掲げている。この方法はパターンランゲージという形で、彼とその同調者が設立した環境構造センターで、実際のプロジェクトに用いられている。なかでも1969年のペルー低所得者住区コンペ案では、そこで行なわれるペルー人の生活をその中にはいって一緒に生活することにより観察すると同時に、施工や

材料も計画のなかに取り入れ、64個のサブシステムつまりパターンをつくり出し、それによってプロジェクトがつけられている。現在 C.アレキサンダーはこのパターンランゲージを量的、質的にも向上させると同時に、一般性

のある、彼自身のポキャブラリーとしてではない、建築および都市の基本的要求を明示する道具にしようという努力をしている。彼の方法がオーソドックスな着実な発展をすればわれわれの共通な基盤となりうるであろう。



インド村落の分析・構成ダイアグラム